# 九. 二%の人にも幸せな社会を

岐阜市立岐阜中央中学校 3年
鬼頭 さやか（きとう さやか）

9.2%。これは、内閣府の令和5年版障害者白書に掲載されている、日本における障害者の割合です。障害者基本法では、「障害者」とは身体障害、知的障害又は精神障害があるため、継続的に日常生活または社会生活に相当な制限を受けるものを言う、とあります。厚生労働省「患者調査」を見ると、障害者は年々増加していることが分かります。

私の弟にも障害があります。弟は人より4ヶ月も早く生まれてしまった「超未熟児」です。今でこそ普通に歩いたり、話せたりしていますが、5歳まではどちらもほとんどできませんでした。体幹が安定しないため、転びやすく、手を上手くつけないため、けがが絶えませんでした。弟は大きくなるにつれて、「みんなは何でも上手にできるのに、僕はできない。」と言うようになりました。手先も不器用で、1人でできないことも多いため、様々な場面で、母が付き添っています。体育のリレーでは、「僕がいる班は負けちゃうから申し訳ない。」と気にします。けれども、これまでに「弟のせいで負けた。」という子は、1人もいませんでした。本当にありがたいことです。稀に、心ないからかいを受けて、傷つくこともありました。だけど当時の先生方の支えで、すぐにそれもなくなりました。

弟と私は、よく話をします。好きなこと、学校の給食、苦手な勉強。何気ない会話ですが、私の落ち着く瞬間です。最近は生意気になってきて、ケンカすることもしばしばです。生意気なところ、笑うと可愛いところ、不器用なところ、意外と負けん気が強いところ。全部まとめて、私は弟が好きなのです。

多様性が叫ばれる今、誰もが生きやすい世の中を目指し、様々な壁を見直そうとする動きがあります。男女の「らしさ」を強要しないこと、性差による不利益を生まないこと、人種や生まれた地域による違い、生まれ持った能力のそれぞれ。そういったものへの理解は、ここ数年で一層進んだように思います。ちなみにこの大会、「岐阜県少年の主張大会」ですが、今主張している私は、少女です。

だけど、障害をもつ人への目は、相変わらず厳しいです。先日、弟が電車に乗ったときのことです。電車は混み合っており、優先席までぎっしりの人でした。母に支えられながら乗った弟を見て、数人の若者が優先席に座っていた数人の若者が、スマホを見て知らんふりをしたり、寝たふりをしたりしたそうです。彼らは「譲っていただけますか？」と遠慮がちに頼んだ母を一にらみして、席を立ちました。席を譲ってくれないわけではありません。だけど、なんとなく引っかかります。このことからも、やはり壁はあるな、と感じました。

私が感じる壁は、例えば呼び方にも現れています。障害者、障碍者、障がい者。この違いが分かりますか。「害」という言葉を使う「障害者」、「ささえる」という意味に置き換えた「障碍者」、ひらがなで表記した「障がい者」。文字で表せばこんなに違うのに、発音は全て「しょうがいしゃ」です。地域や企業、団体によっては、「チャレンジド」という呼称を使用する例もあるそうです。しかしそれが浸透しているかと言えば、まだまだです。

誰もが幸せに生きていく社会をつくるためには、「相手の立場になって考える」ということが重要だと思います。自分がされて嫌なことはしない。言われて傷つくことは言わない。そして、相手のことに興味を持って接する。ほんのちょっとの優しさと、認め合う心を持てば、今より世界は優しくなれるんじゃないかと思います。

私は最近、英語の教科書で車椅子テニスの国枝慎吾選手と上地結衣選手について学びました。障害を持ちながら、第一線で活躍し続けるお二人を、素直にすごいと思いました。

弟は「好きで障害を持っているわけじゃない。」と言います。人間は百人いたら百の個性があります。私は障害も一つの個性と捉えるべきだと考えています。9.2%の個性を持つ人たちが、何の壁も感じずに、自分らしく生きられる社会が来ることを願っています。皆さんは、どのように感じましたか。「しょうがいしゃ」、どのように呼びますか。